

短い秋が来ました。道沿いのナンキンハゼの葉が少し黄色くなり始め、緑の実の房は縮んで黒くなったものも混じるようになり、とうとうはぜて中の白い種子が顔を出すものもみられるようになってきました。下の歩道には種の殻が落ちて、踏むとバリッと音がします。あっという間に訪れたひんやりする朝の空気は大好きです。でも、つい数日前まで半袖でした。日本の四季は、二季となりつつあることを感じます。

本日も熊本労災病院のHPを訪れていただきありがとうございます。

まずお知らせですが、来年度中にも、当院に歯科・口腔外科が設置されることが決まりました。私自身、以前からその必要性を感じ、できれば設置したいと期待を持っていました。県南地域では入院設備を持つ歯科・口腔外科がなく、在宅障害児の歯科治療や、顎・顔面領域の外傷やがんの治療などでの空白地域であることから、昨年になり、県、歯科医師会、大学医局からもその設置を要請されていました。このほど、医師派遣元となる熊本大学歯科口腔外科教授のご支援もいただき、早ければ来年秋にも開設できることとなりました。院内での場所は、現在の外来棟の隣にある、リハビリ棟の一角で、模様替えをして作ります。5床程度の入院病床も用意します。当院が開設されて間もなく、昭和31年～38年の間、歯科が設置されていたという記録がありますが、当時はおそらく開業歯科も少なく、当院の設立理念に沿った勤労者医療の一環でもあったのでしょうか。今回は、開業されている歯科の先生との機能分担も明瞭にして、院内の他の診療科との連携での、歯科口腔外科診療や、在宅ケア児の入院治療などを担うこととなります。これまで八代地域から大学病院などへ紹介されていた患者さんも当院での治療が可能なると思います。まだ少し先ですが、設置の後は、是非お気軽にご利用いただければと思います。

ウクライナから、世界の関心がガザに移っています。医療者として、どこであれ、高価な弾薬で、一度に何百人も亡くなるニュースを聞くたびに、お一人お一人を最大限に丁寧に診療している自分たちの医療に虚しささえ感じます。「ガザではもう電源が切れそうだ」というニュースが流れますが、そうなれば人工呼吸器、保育器、点滴のポンプ、モニターに至るまですべて無用の長物と化し、生命維持など夢みたいなことになります。中東の対立は、発祥時期の順に、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、の間の、長い歴史の中で積み上がった憎しみや報復の連鎖によるもので、宗教に比較的縁遠い日本人にはなかなか理解が難しいところもあると思います。世界に散らばらざるを得なかったユダヤ教徒が集まって国=イスラエルを作るときに、それまで住んでいたパレスチナ人が故郷から追い出され、多くはレバノンなどに移住し、一部はヨルダン川西岸地域や今問題のガザなどに住み、今度はユダヤ人から厳しい状況に置かれる、という、血で血を洗うような関係が続いてきました。私は、2000年に、生体肝移植立ち上げの準備としてサウジアラビアに1ヶ月ほど滞在したことがあり、そのときに初めて中東の人たちと接しました。その数年前に行ったパキスタンとも違って、イスラム教の教えにかなり厳格に従う国でした。驚いたのは、結婚式に連れて行かれたときに、男女同じ場所に集まってはならず、ものすごく広い会場に、まず男性だけが集まり、新郎だけで新婦はおらず、ひとしきりお祝いが済むと男性がどーっとみんな退出して今度は女性だけが集まる、という有様でした。婚姻関係にない男女と一緒に車に乗るのもだめで、航空券を買いに、病院の秘書さんに同行を頼んだら、捕まるのでできない、と断られたのを覚えています。脳死移植があり、肝臓の摘出に飛行機で向かうことがありましたが、現地の空港に着くと、一刻を争うどころか、「お祈りの時間だから」と空港内の専用の部屋(祈祷室)に行ってしまうと私だけぽつんと待つ、みたいなこと

もありました。日本人からみればすべて不合理ですが、イスラムの教えがすべてに優先される環境にあります。病院で親しくなった青年医師はヨルダン出身で、「きれいなところだから一度ヨルダンに行ってみて」と何度も言われました。中東というところでも砂漠みたいな印象がありますが、ヨルダンは南九州くらいの緯度であり、農業国で肥沃で美しいそうです。世界の人と知り合い、その文化を理解して受け入れるという寛容さがないといつまでも争いが絶えないと思うのですが、彼ら相互の憎しみは計り知れません。中学生の頃、学校で、モーゼの十戒、という映画を見たのを覚えています。もう知らない人も多いでしょうが、チャールトンヘストンが主演でした。海(=紅海)が割れるシーンで有名な映画です。ユダヤ人であるモーゼは、その「十戒」の中で、「汝、殺すなかれ」と戒めを書いています。今のユダヤ人の憎しみは、十戒を超えているのでしょうか。単純に、困った人を助ける、病気やけがの治療をする、政治など抜きにして、人が普遍的に持つはずの利他の気持ちに正直に生きていくことは、案外難しいことです。

10月には、移植医療推進月間、そして乳がん啓発月間でもあります。

移植に関しては、各新聞が、「臓器提供が少ない」という論調で特集記事を組んでいます。とはいえ、少ないながらも、着実に増えていて、年間100例以上の脳死下臓器提供という、昔は夢だったことが現実になっています。しかし、人口100万人当たりの提供数はまだ1未満で、韓国の9、米国の40などに比して、世界的にも明らかに少ないのが現状です。10月中は、全国で移植のシンボルカラーのグリーンでいろいろな施設をライトアップしていて当院も含め、熊本は全国でもその参加施設が一番多い県です。自分自身は、もし亡くなって自分の臓器がどれでも他の誰かの生存や生活の質向上に活かされるなら、ぜひそうしてほしいと思っています。余裕のない日本ではありますが、やはり究極の利他の行為が根付くようになればと思います。

乳がんは、早期に見つければ高い確率で完治する病気であることをみなさんに知っていただき、ぜひ定期的な検診を受けて下さい。当院乳腺外科には、林先生という、微細ながんでも正確に見つける、診断能力が極めて高い先生がおられます。まだ検診を受けておられないかたは、是非年に一度の検診を習慣づけてみて下さい。

寒暖差が激しく、だるさに苦しむようなかたも少なくないと思います。年末に向けて、ゆつたりと一生懸命仕事をしましょう。今後とも、労災病院をよろしく願います。